
和葉×カズハ

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和葉×カズハ

【Nコード】

N1636B

【作者名】

雪場

【あらすじ】

救急車で運ばれた和葉と、彼女を追って病室へ駆け込んだ平次。そこから始まる“自分”を求めている迷路の行く先は…？私初挑戦の、長編純正平和。お目当ての作者の方の作品の前に、前菜のような感じで読んでいただけると幸いです。

1: prologue (前書き)

1月31日、2月1日付けで修正いたしました。が、「段落始めのマス」と極一部の言い回し、あとがきの追記のみの修正で、内容には影響ありません。

1: prologue

「黙想　っ！」

きちんと二列に正座した部員が、一様に目を閉じて指をへその前で組む。

どこか張り詰めた沈黙が流れる。

（今日のサイレン…なんやったんやるか…）

目を閉じたまま、平次は記憶を少し遡る。

練習中に、遠くから聞こえた救急車のサイレン。

少しずつ大きくなって…ごく近くで止まったように聞こえた。

その後は、いつものように掛け声と踏み込み足の音の嵐に巻き込まれて、聞こえなくなった。

けど…、なぜか引つかかる。

（学園内で、誰か怪我でもしたんかいな…？）

ふっと我に返る。そろそろ時間だった。

「やめっ！」

短く言い放つと、両手を床について頭を下げる。練習終わり、だ。

「ほな、またな」仲間に軽く片手を上げて挨拶を済ますと、鞆一つを肩に掛けて昇降口に出る。

遠くからのバレー部の掛け声を聞きながら、下駄箱を開け、靴を手にとった。

反対側にも、誰かいるらしい。話し声がした。
平次の知らない声だった。

「なあ、さっきの何やと思う？あの停まっとった救急車のヤツ」

（救急車…？）

その単語に耳がピクンと反応して、平次の手が止まる。

反対側で神経を尖らせている彼のことなど気づくよしもなく、下駄箱の向こうから別の間延びした声が答える。

「ああ、あれ？高2の女子が頭打って倒れとったらしいよ。遠山和葉…とか誰かゆうつとったけど」

遠山和葉……？

トオ ヤマ…カズ ハ…？

パサッという軽い音がした。

その音は、平次の手から、靴が滑り落ちた音。

落ちた一足の靴は、

床に当たって、バラバラに飛び跳ねる。

片方はちゃんとした向きに、

もう片方は、引っくり返された亀みたいに靴の底を見せて、ゆっくりと揺らぎながら。

さっきの男子生徒二人が、何も知らずに昇降口のドアを開けて、外へと出て行く。

ゆらゆらと不安定に揺れる靴を眺めていた平次が、はっと我に帰った。

（和葉が…運ばれた！？）

慌てて靴を引っつき、どうにか足を押し込むと、外へと飛び出した。

いつの間に降り出したのか、細かい小雨がミストの様に顔をひんやりと濡らす。

（ここから一番近い救急病院ってゆうたら…難波大学病院かな）

目を細めると、傘も差さずに足を校門の方へ向け、思い切り地面を蹴った。

1: prologue (後書き)

どうも、雪場です。

随分間が開きましたが、ようやく書き終えたので新連載、長編、純正平和で。

タイトルは、「和葉×カズハ」と書いて「カズ×2」と…読むかどうかはお任せします。

ちなみに剣道部の部分は、私の学校の参考になりました。去年まで在籍していたので…多少かじった程度ですが（笑）

P・S・前連載、「墮罪」の感想コメント欄なんかで、次回は「天使が舞い降りて」と言いましたが、諸事情により今回別の新しく書き起こした作品になりました。どうも申し訳ありません。

2 : a l t e r n a t i v e

「和葉っ！」

走ったままの勢いで息を切らせたまま、病室のドアを押し開く。

しんとした部屋の中。重く沈んだ空気は、小雨のせいだけじゃない。

先に来ていた、服部平蔵、静華、遠山刑事部長…

一様に硬い表情を順繰りに目で追って…真ん中のベッドで止まる。

上半分が、少し持ち上がったベッド。

その傾きにもたれかかるように、彼女は座っていた。

入ってきた平次に気づいていないのか、その目は白いシーツをぼんやりと眺めたまま。

ほんの少し茶色があった髪。その上に巻かれた包帯が、痛々しい。

「…平次か」

平蔵が呟いて、それきり口を閉ざす。

まるで、映画のワンシーンみたいに、固まったままの世界。

誰かが一言でも喋れば壊れてしまいそうで…押し黙ったままの皆。

「どうしたんや…？和葉、大丈夫なんやろ？」

遠山のおやつさんが、目を逸らした。

まるで夢の中みたいに思われて、頼りない足取りで、病室の中へ入る。

そうする気も無いのに、靴音が響く。

見慣れた…いや、さっきまで一緒だったその肩に、ぽん、と手を乗せる。

「和葉…大丈夫か？」

顔を近づけ、和葉を覗き込んだ。

どこか寂しげに細めた目の中に覗く、透き通った瞳。

吸い込まれそうな黒のその瞳に、平次の顔が映りこむ。

だけれども、瞳の焦点は、平次の遥か後ろの虚空を見つめたまま。ただ単に“映った”だけで、届かない彼の姿。

和葉の唇が、ゆつくりと、動いた。

「誰なん…？」

ダレ
？

壊れたラジカセのように、同じ質問が頭の中で何度もリピートされる。

「アホっ和葉、オレや、分かんのか…和葉！」

華奢な肩を鷲掴みにして、激しく前後に揺さぶる。

和葉の首が力なくガクンガクンと大きく揺れ、ポニーテールが広がった。

「おいっ、平次、止めい…落ち着かんかい、平次！」

「和葉、しっかりせい、思い出せや和葉っ！」

平蔵の言葉も耳に入らないのか、その手を止めようとしないうち平次

「ええ加減にせえ、お前まで取り乱してどないするんや」

後ろから平次の身体に手を回すと、平蔵は平次を無理矢理に引き剥がす。

羽交い絞めにされた腕を抜こうと必死にもがく平次の鼻の先で、白塗りのドアが閉まってゆく。

服部平蔵が、その知らせを聞いたのはちょうど2時間前。

一つヤマを片付けて、次に取り掛かる為に別のクリアファイルを持ち上げた時。

大概の事には動じない刑事部長が、蒼白になった顔でそれを知らせてくれた。

彼に早退の許可を出し、自分もなるべく早く向かう旨を告げた。

ようやく辿り着いた病室で聞かされた状況。

校舎に寄り添うように建てられた倉庫。その陰で倒れていた彼女。意識の無い彼女が運ばれ、懸命の治療の結果至る今の容態…。口にするのさえ辛いだろうのに、刑事部長は淡々と伝えた。意識的にだろう、仕事のときと、変わらぬように…

そういったたった2時間の間のことが、凝縮され、走馬灯のように甦る。

閉じていた目を開き、自販機のコーヒーのボタンを押す。大きな音が響き、缶が転がり落ちてくる。それを取り出すと、平蔵は歩き始めた。

病室の前のベンチに、うなだれたまま座る平次。

「少しは落ち着いたか」

返事代わりに顔を挙げた息子に、缶コーヒーを手渡す。プルを引くことも無く、じっと側面の図柄を見つめたまま。そのまま、徐に口が動く。おもむろ

「なあ…医者、和葉のこと、どう言ってるんか…？アイツ、元
に、戻るんやろな…」

言い終わって初めて、顔をこちらに向ける。
一瞬本当のことを伝えるべきか計算する自分がいたが、
平蔵は、すぐに悟った。

躊躇した時点で、自分の負けなのだ、と。

「医者は…わからへん、やと」

黙ってプルトップを引き抜くと、平次は缶の中味を流し込む。

なぜだろう、飲みなれたはずの缶コーヒ―が妙に喉を衝いて、平次は何も言わないまま眉をしかめた。

2: alternative (後書き)

ブログに重ねて、作者の雪場です。

再び始まった連載も…結局また(「砂上の楼閣」と同じ)「記憶喪失ネタ」で(苦笑)

前よりは文章がマシになったことを願いつつ、キーボードを叩いてます。

あらずじで「前菜に」といつていた割には重い話ですが(リクエストの「甘い話」のつもりで書き始めたのに…)、下手なりに頑張りましたので最後までお付き合いいただけると幸いです。

今回珍しく(というか初めての)平蔵視点…平次以上に書きづらいですね…不自然になっていないことを祈ってます。ちなみに、次回からは無い予定です(笑)

それでは、失礼します。

3 : p r e t e n d

病室には、平次と和葉の二人。

和葉に背を向け、窓から外を眺める平次。

雨はまだ止まず、細長く水滴のついた窓が、微かに反射して平次の顔を映す。

窓の下には、時折黄色や赤の傘が、病院に出入りするのが見えた。

「…あれでよかったんやろか、アタシ…」
ポツツと呟く声に、振り返る平次。

「あれで、よかったんや」
抑揚の無い声で、鸚鵡返しに答える。

さかのぼること数時間前、和葉の病室を訪ねてきた人たちがいた。

「和葉ちゃん、大丈夫？」
開口一番そう訊かれて、答える。

「うん、お見舞いに来てくれて、おおきにな。蘭ちゃん」

教えられたとおりに。

写真を見せられて、ついさっき覚えた名を。

そうして、笑ってみせる。

今度は教えられた訳じゃなく、無意識に。でも、少しぎこちない笑みで。

「思ったより容態、よさそーじゃねーか」

付いてきたコナンも、病室の隅で服部に囁く。

「ああ…まあな」

口から漏れるのは、なぜか歯切れの悪い返事。

和葉が、和葉を演じとるだけなのに…

なんでやろ、騙しとるみたいに後味が悪いんは…

「あれで、よかったんや」

回想から戻り、確認するようにもう一度繰り返した。

そのまま黙って足を進め、ベッドの横に立つ。

「なあ平次…」

少し違和感が残るのか、ぎこちなく“平次”と口にする。見上げ

る眼も、どこか不安げに。

「なんや…和葉？」

「アタシって…和葉って…何なん？」

ゆっくりと、頭の中に吸い込まれていくその言葉。

和葉って…何…？

かずはって…

幼馴染？

ファーストチョイスのその単語。

「いつも平次の面倒見てるお姉さん役やねん！」
そういえば…こんなことも言うつたっけ…。

着物着て、鞠を突いていた、あの姿。

あれも…和葉。

せやけど…

やっぱり…

“オサナナジミ”…？

「何やるな…」

誤魔化したように、とぼけたように呟く。

平次の心中を知ってか知らずか、もう一度和葉が口を開いた。
大事なことにように、大切そうに、ゆっくりと。

「なあ、アタシずっと考えてたんやけど…

アタシって、“和葉”なん？」

『アタシって、“和葉”なん？』

その立った一行の言葉の意味が、実質的な意味を伴って認識されるまでに、
怖ろしく時間がかかったように感じた。

「…は？」

その結果絞り出されるのは、答えにならない声だけ。

「せやから、はっきり言えへんけど…」

ゆっくりと和葉の目線が上がって、真っ白な病室の天井で止まる。
先生に当てられた小学生みたく、空中を見つめながら自分の考え

を整理して形にしていく。

「ほら、“蘭ちゃん”とか“平次”のこと、アタシ全然覚えとらへんやろ。気がついたら、ベッドの上で見たこと無い人に、心配気な顔で覗かれとって…。なんか別の星の人に捕まってもうた宇宙人みたいな気がしたんよ…」

不安そうな目を、ちらつちらつと平次に投げかけながら喋る和葉。ようやく、平次にも状況が飲み込めかけてきた。

「よーするに、“和葉”としての記憶がないから…自分は和葉やない、ちゅーわけか…」

和葉がコクンと小さくうなずく。

「さよか…」

何か言わなければいけないと思うのだけど、言葉が出てこない。

目の前にいる“和葉”は、ほんまに和葉なんか…

それすらも、分らない。

オサナナジミとして、一番近くにいたはずなのに、分らない。

（和葉って…なんやろな）

不意に開いた扉から入ってきた、恰幅のよい看護婦が、柔らかい物腰で平次に帰るよう促した。

3 : p r e t e n d (後書き)

ちよつと本題に入りかけてきましたが…多少退屈だったでしょうが？これから徐々に話も転がり始めるつもりですが…不定期更新になるかもしれません。塾が…(泣)

感想なんかも、頂けると嬉しいです。それでは、失礼します。

4 : c o u n s e l

いつもの通学路を久方ぶりに一人で歩き、家に帰った。

奥に「ただいま」と沈んだ声をかけてから、黙って二階への階段を上る。

部屋に入るや否やカバンを隅に放り投げ、平次は毛足の短い絨毯の上に大の字になった。

腕を頭の後ろで組み、天井を見上げる。

片手を頭の後ろから目の前に移し、ちらつと腕時計を見た。

まだお見舞いに行くにはしばらく時間がある。

それを確認して、また頭の下へと手を戻す。

そうしてもう一度、ぼんやりと天井を見つめる。

笠のついた照明や、最近少し黒ずんできた隅の壁紙が自然と目に入ってくる。

けれども平次はそれらのずっと先、全く別のものを眺めていた。

「和葉って…何なんやろな」

何度目になるか分からないけれど、またもう一度自問してみる。

まるで固化してしまったみたいにその文字だけが浮かんできて、頭がそれ以上動かない。

ちようど、考えるのを放棄してしまったように。

もう、答えは出ないものだと言ったように。

「アカン、こんなんやったらいつまでたっても答えでーへんわ！」

反動をつけて身体を起こすと、頭をかきむしったが、急にピタッと手の動きを止める。

（あ、せや…）

黙って立ち上がると、隅に転がったままのカバンの中から携帯を取り出した。

「あ…工藤か？」

『なんだよ、いきなり』

不機嫌そうな声が機械越しに聞こえる。

「いきなり」以外に遠方の相手にどう電話が出来るのだろうと思いつきながらも、切られちゃかなわない。

「スマンスマン、んな事より…」
とりあえず謝って、本題に入る。

「…で、工藤はどう思う？」

『……………』

返事の代わりに聞こえてきたのは、
チツと微かに舌打ちする音と、わざとらしく大きな溜息。

『なあ、オメーはオレに、どーゆー答えを期待してるんだよ？』

「せやから…、工藤はどう考えよるんか…」

『それ聞いて、意味あんのか？』

「…は？」

『だから、大事なのはオレがどう思うかじゃなくて、オメー自身が和葉ちゃんをどう捉えてるのかじゃねーのか？人の意見聞いたつて、しゃーねーだろ』

『切るぞ』と言う初めと同じ不機嫌な声にちゃんとした返事も出
来ないまま、切れた電話。

そこには居ない和葉を見つめたまま、携帯をポケットに突っ込む。

（和葉…な）

腕時計を見る。今から出ればちょうどいい時間に着くだろう。

「しゃあないなあ…」

なにが“しゃあない”のか自分でも分からなかったけれども、そう呟いて壁に掛かった野球帽を取る。

「とりあえず、お見舞い行こか」

帽子に向かって言うと、部屋を出る。

自分にとっての“和葉”を探しに。

“カズハ”の居る難波大学病院へ向かって。

4 : c o u n s e l (後書き)

どうも、ここまでお付き合い頂きましてありがとうございます。

お約束とも言えますが、自分のことには疎いくせに他人のことはよく分かる探偵二人。

今回も、しっかりと他人のことは指摘します(笑)

自分のことは「推理」とは言わないからなのかもしれませんが…二人のその辺の噛みあい具合が結構気に入っています。

どうでもいいことですが、SAXの野球帽が欲しいです…(おい)
一応元野球部です…。それでは。

5 : perch

「あのさ、平次…ごめんな、昨日へんな事言ってもうて」

開口一番、ベッドの上でしおらしく謝る和葉。

意識してるのか、まだ言い難そうに“平次”と口にいる。

（コイツも、一日中考えとつたんやろな…）

ちよつと寝不足気味に、赤く腫れた目。

ひよつとした、寝不足のせいだけじゃないかも知れない。

（まったく…相変わらず世話の焼けるやつちゃ）

ベッド脇に椅子を持ってきて和葉と並ぶように座る。

ポン、と和葉の肩に手を置くと、びっくりした様にこっちを向いた。

怯えた小鳥のような目。

今まで見せたことの無い目で。

（…守ってやりたい…）

初めて見た瞳の前で、初めてはつきりと形を成す気持ち。

小鳥が安心して身をゆだねられる、どっしりとした大木。

多くの止まり木ともなる枝を、力強く四方へ生い茂らせた木。

漠然と、そんなイメージが平次の脳裏に浮かぶ。

「まだ…悩んだるんやろ？」

目を二、三度しばしばさせ、コクリとうなずく。

「自分が誰かわからへんのか？」

もう一度うなずいた。

それを見て平次がホッと小さく溜息をつく。

「別に…誰でもええんとちゃうか？」

「前の和葉は前の和葉、今のオマエはオマエや。こんな訳分からんやつのおーとること、どうでもええかもしれへんけど、オレは…今のカズハが、自信持って毎日楽しく過ごしてくれたら、それで充分や」

「…へい、じ…」

うつすらと涙の膜が被う、大きな和葉の瞳。

そんな瞳に見つめられて、かああつと平次の顔が真っ赤に染まる。

「か、勘違いすんなや、オレはただ和葉の幼馴染としてやなあ…」

慌ててバタバタさせた両手が、机の上の花瓶に当たった。
幸い割れはしなかったものの、大きな音を立てて花瓶が跳ね、花
が飛び出し、床に水が広がる。

「あつ！しもつた！カズハ、ちよつと雑巾とつてくるさかい、待
つときーや！」

急いで花瓶と花を拾い上げると、それらを持ったまま病室から逃
げるように出る。

個室を出ると、完全に閉まった病室のドアにもたれかかり、安心
したようにゆっくりと息を吐いた。

平次の目の前で、花瓶から雫が一滴、ポトリと床に落ちる。

ついさっき、自分に生じた感情は、一体ナンなのだろう、
ドアに背をつけたまま、答えるはずの無い花瓶に尋ねる。

「ま…何でもええか」

最近都合が悪くなるとすぐコレやな、と苦笑する。

答えは出とるのに、いや、出そうと思えば出るはずなのに、

そのプロセスと結果を認めんのが癪で、
いや、癪やのーて怖いんかもしれへんな…

「ま…何でもええか」

もう一度ボソツと呟く。

とにかく…

和葉の記憶が戻るまで…

オサナナジミ、停学ってとこやな…。

花瓶を持ち直すと、ゆっくりと歩き出した。

5 : p e r c h (後書き)

どうも、雪場です。今回は、タイトルの和訳を。p e r c h (止まり木)です。適当に気分に合わせて英単語を使っているので、そう深い意味ありませんが…。

「初めて見せた瞳」って辺りにはちょっと考えがありまして。平次の初恋の件を見てて思ったんですが、「幼馴染」という色眼鏡を外して、客観的に見たときに、恋愛対象として一層認識されるのかな…なんて。そういった、「色眼鏡を外す」行為が今回のサブなテーマでもひそかにあったりします。その象徴は、いろんなところには撒いたつもりですので、頭の片隅にでも入れて読んでいただけると幸いです。

6:identity

音も立てずに、横滑りして閉まったドア。

薄く、ビニールみたいに広がった水溜り。

天井の蛍光灯が映りこんで、ぼんやりと光っている。

少し見つめた後で、パジャマの袖で潤んだ目を拭う。

顔を何度か勢い良く振ると、その度にポニーテールがぱさつと顔に当たる。

「アタシも…カズハなんやね」

会ったことも無い、ちょっと色の黒い男の子。

その人から言われた、初めて聞いた“自分”の名前。

アタシのことを「オサナナジミや」と言っけれど、アタシは去年、いや1ヶ月前のことすら憶えてへん。

起きるまで覚えていたユメの世界みたいに、ぼっかりと空いた記憶。

“空白”^{ブランク}だけがそこにはあって、

あとは急に朝になったみたいに、病院のベッドのシーンがカラーで流れてくる。

…それでも、何故かその人は毎日、同じ時間に来てくれた。

そして…励ましてくれた。

アタシを、認めてくれた。

最初は戸惑っていたけど…

やっぱり因縁なんかな、ずっと一緒やったみたいに、心の隙間にピタッとはまってくれる。

『今のオマエはオマエや』

その言葉で、肩に重く押し掛かっていた物がふっと軽くなった。

「おおきに…」

そう呟いてからベッドから飛び降り、緑のスリッパをひっかけると洗面台の前に立つ。

薄いブルーのストライプが入ったパジャマと、鮮やかな黄緑のリボンが目飛び込んでくる。

自分の存在を確かめるようにぺちぺちと自分の頬に触れてみる。
軽くうなずいて、鏡の中から彼女を見つめている二つの瞳を、しっかりと見据えた。

どこまでも、透き通った、吸い込まれそうな瞳。
その中に、“自分”が映りこんでいるのが見えた。

「アタシは…アタシや」

妙に真剣ばった自分の顔が、大袈裟に作った表情に見えて思わず笑ってしまう。

たった独りで投げ出されたこの世界は最初、ひどく憂鬱に見えた。

…でも今は、そうじゃない。

今はもう、心から笑う事だって出来そうな気がする。

「全部…平次のおかげや」

（やっと…普通にこの名前が言えるようになった…）

久方ぶりに、眩いばかりの“カズハスマイル”を鏡に投げかける。

鏡の中の自分も、にっこりと微笑んでいた。

6::identity(後書き)

ここまで読んでいただいてどうもありがとうございます。

ちよつと遅めの展開ですが、今回はのんびりチック(今造った言葉です)な話なので、勘弁してやってください。

それにしても…長い文字数が書けない…。今に始まったことじゃないんですが(汗)

一話あたり3〜4000にしたいな、とはいつも思っているのですが、出来たためしもないですし(苦笑)

さて、和葉の自分に対する捉え方も少し変わり、次からちよつとは甘く…なるように思いますが…。それでは、失礼します。

7 : blossom

病室に持ち込んだ推理小説のページを捲る手を止め、ふっと平次は顔を挙げる。

相変わらずベッドの上で半身を起こしたままの彼女も、文庫本に夢中に見えた。

（今のコイツは…オレとは何の関係もあらへん、単なる他人なんやろか…）

ちよつと遠く見えるカズハ。

目を本の上に落としたまま、無意識に髪をかき上げる彼女。

他人だと思った途端、そんな何気ない仕草の一つ一つが何故だか大人びて見えてしまう。

（…カズハ…？）

気づいたのか、彼女も顔を挙げた。

「…どしたん？平次」

少し首を傾げ気味に問う彼女。

急カーブを描いて上昇する彼の心拍数。

「い、いや…なんでもあらへん」

慌てて顔を背けると、立ち上がって窓から外を眺めている風に装った。

心臓は、まだバクバクいつている。

（どうしてやろ…）

そう思った刹那、なんとなく懐かしいものが、胸の中に込み上げてきた。

（なんやらか…この感じ）

いつもより速いペースで鼓動している胸に右手を当て、目を閉じる。

…懐かしい感じ…

閉じられた目の中の、真っ暗な世界を横切ったのは、淡い色をした一片。

(…桜…?)

そう思ったとたん、黒をバックにふわっと数を増して舞い始める花びら。

そして、それと共に、

『まるたけえびすに、おしおいけ…』

旋律に乗ってどこからか流れてくる、あの歌声。

もう一度キュンと縮んだ心臓が、教えてくれた。

(せや…、あの時や…)

『よめさんろっかく、たこにしき……』

目を開けて元の病室に戻った世界。

思わず、チラッとベッドの上の彼女を視界の端で捉える。

彼女はきょとんとした表情で、こつちを見つめているまま。
その無垢な表情に、せつかく少し落ち着きかけていた心臓が、再び忙しく拍動を始める。

（アカン、アカン。冷静になれや…）

急いでまた目を逸らし、窓の方に向き直る。

時刻は6時を過ぎ、日のすっかり落ちた外は、目を閉じたときと同じ真つ暗な闇。

病院の前に設置された水銀灯と、向かいのビルの灯りが、淡白にちらちらと光っている。

今頃なら、きっと涼しい風が吹いているだろう。
火照った顔が、無性にその風を欲しがっていた。

「カズハ…屋上、出てみーへんか？」

平次はガラス窓に薄く映った自分の顔を見ながら、彼女に尋ねた。

7 : blossom (後書き)

掲示板でクリスマスの放送が「迷宮の十字路」と知り、偶然のタイミングに少し驚いた雪場です。

大体私は心配性なもので、一作丸まる書き上げてしまわないことには投稿できない人間なので、この話も一月ほどまえに書いたのですが、まさか次のテレビ放送（映画）が迷宮とは…。もう一度、「手毬歌」と「花舞う街で」を聴くのが楽しみです。

話は変わりますが、桜の花って、昼よりも夜、背景が暗い方が引き立つと思うのは私だけでしょうか？今回もそんなイメージで花びらが舞うバツクを「黒」としてみました。

夜の闇の中にライトアップされたお城と桜の花、なんてのもなかなかロマンチックですよ。当然その前に居るのは、やはり平和…でしょうか？

それでは。

8 : m y t h

「…お、く、じょう?。」

まるでそれが不思議なものみたいに、鸚鵡返しに呟いた。

「せや。きつとええ風吹いてんで。ずっと部屋ん中おつても、氣いめいるやろ?。」

そう言えば、氣がついてから一度も外に出たことが無かった。

この前まで腕に繋がれていた点滴の器具を右手で押しながら、病院中をうろつろしたことはあったけど、その後で「絶対安静」と担当の先生から酷く釘を刺されてしまったし。

「せやけど、アタシあんまり動いたらアカン、ってお医者さんに言われてんねん」

「さよか…」

口に手を当てて、ちよつと考え込んだ平次。
でもすぐに手を離すと、

「カズハ、ちよつと待つとき」

そう言い残して部屋を飛び出した平次。

「これならええやろ?。」

ニカツと笑いながら平次は戻ってきた。
どこで見つけたのか、青い車椅子を押しながら。

「なあ平次、やっぱ勝手に持ってきたらマズインとちゃう？」

「心配いらへんて…おっと、このドアやな」

ジジッと嫌な音を立てる蛍光灯に照らされた、灰色のドアを平次が開ける。

左手でドアを押さえたまま、車椅子を外へと引っ張り込む。

片手での不釣り合いな力の掛け方に加え、屋上との間にある数センチの段差。

急に左後輪がガタンと落ち、傾いた車椅子と衝撃で思わず身体が投げ出されそうになる。

「キャッ！」

地面にぶつかる、そう覚悟して彼女は目をつぶったが、

コンクリの地面より先に、がっしりとした二本の腕が彼女の身体

をしつかりと抱き上げた。

「えっ……」

恐る恐る目を開いて、上を見上げる。

「大丈夫か、カズハ」

心配げに呟く彼の言葉よりも、

トクン

彼の心臓の音が、背中から微かな振動と共に大きく響く。

彼の胸と密着した背中を中心に、じんわりとしたものが広がってゆく。

どんどんと、とめどなく。

「…あったかい…」

初めて感じる、人の温かみ。
体温以上の何かで、手や足の先までほんわかと心地よく温まってくる。

「よし、ほんならちゃんと屋上出て、夜の風でも…」
「いやや」

車椅子に彼女の身体を戻そうとした彼を、小さい子供のように頭を振って遮って、

初めてした、口答え。

「もうちょっとだけ…このままにして…」

うつむいたまま、夜の風の中に消え入りそうな声で呟くと、彼は一瞬困ったような顔をしてから、黙って彼女の希望に応えてやる。

（ホンマに世話の焼けるやつちゃ…）

そう心の中で言ってみても、何故か顔は益々火照る一方。
少し開いたドアからの冷たい夜風が顔に当たれば当たるほど、熱を増してゆくのは解せないことだった。

彼女を車椅子に戻し、屋上に完全に出るまでにどれだけ経っただろうか。

ちらつと自分の腕に目を落として、平次は時計を外したまま病室に置いてきたことを思い出す。

広い病院の屋上。その真ん中で、車椅子を押す手を止めた。手持ち無沙汰になった両手を、上着のポケットに突っ込む。

「なあ平次…」

星空のように瞬く街の灯をバックに、彼女が少し明るく、口を開く。

「なんや」と応える代わりに、身体を少し寄せた。

「平次の昔の話、聞いてもええ？」

そう訊かれて、

「しゃあないなあ…」

内心とは裏腹にぞんざいに呟いてみる。

見上げると、大阪には珍しいほどの綺麗な星空が、輝いていた。

「ほんじゃな…」

何から話してやろう、と考えかけて、思いとどまる。

順序など、些細なことなのだ。

思いつく限り全てのことを、目の前の彼女に話してやるつもりなのだから。

8 : myth (後書き)

どうも、クリスマスより先に期末考査が近づいてきて修羅場ってる雪場です(苦笑)

精神状態が普通ではないので(数学のせいだ)いつも以上に乱文になってますが、見逃してやってください。

えっと、今回もタイトルの説明を少し。「myth」(神話)です。昔の記憶が無くて、今の自分の存在だけがある、っていう状況の彼女にとって、昔の和葉自身の話(もちろん『昔の平次の話』とオブラートに包みますが)は、『古事記』ではないですが、創世の物語のようなものなんですよね。

どうやって今の自分が生まれてきたか、それを知る、という意味を含めて、今回「神話」とさせていただきました。

後は…自分を振り返る、ってコトはそれだけ心に余裕が出てきた、ってコトでもありますね、…ひとまず。それでは、今後ともよろしくお願いします。

9 : o b s c u r e

「朝になりましたよ」

見回りの看護婦さんの声と共に白いカーテンが開けられ、朝の日差しが差し込んでくる。

一回ベッドの中で大きく伸びをすると、はっきりと目覚める代わりに欠伸が出た。

「昨日は良く眠れた？」

「全然」と正直に答えると、看護婦さんはニコツと笑った。

この病院で一番親しくしている看護婦さん。

名前は確か…香月さん。

先月まで神奈川にいたとかいうことで、全く関西訛がないのが逆にここでは目立つ。

（眠れるわけないやん…）

目を閉じるとすぐに屋上の出来事が映し出されて、とてもじゃないが落ち着いちゃいられなかった。

おまけに背中はいつまでもあのままのように熱を持ち続けていたし。

「まあいいわ、それじゃあまた後でね」

スツと立ち上がると、部屋をぐるりと見回し始めた。
ある箇所一旦止まり、もう一度ベッドの上の彼女を見る。

「使うのはかまわないけど、終わったらちゃんと元に戻しておいてね」

明るくそう言うと、部屋の隅に置かれっぱなしだった車椅子を押して病室から出て行った。

看護婦さんの背中がドアの向こうに消えるのを見送って、ホッと息をつく。

車椅子のことは、昨日部屋に戻ってきてからすっかり忘れていた。

（見つけたんが香月さんでホンマに助かったわ…）

患者の為にある程度自由に使える備品なのだろうが、ずっと個室に置いておいたのは褒められたことじゃないだろう。

ましてや、歩けないほどの重病人でも自分は無いのだから。

そんなことを思いながら閉じていた目を開くと、サイドボードの上のものが目に付いた。

（これって…手帳？）

手のひらに収まるくらいの大きさで、真ん中らへんに閉じるためのボタンがついている。

右下には、デープ・ブルーでM・Kの刺繍。

きつとあの人…香月さんが忘れていったに違いない。

急いでベッドから降りると、パールオレンジの手帳を取り、ドアへ向かった。

取っ手に手をかけると、あの人の声がした。

「…ご苦労様です…」

ドア越しに、微かな会話が聞こえる。

話しぶりからすると、同僚の看護婦さんみたいやな…、と彼女は思った。

（向こうにおるんなら、すぐ渡せばええな）

ドアを勢いよく開け、軽く挨拶をして、「忘れてはりましたよ」と笑顔で手帳を渡す…、

そう頭の中でシュミレーション出来ているのに、何故だろう。身体が動かない。

「どうなん、ここの娘^こ。もう大分ええんと違う?」

少し割れた声。もう一人の看護婦さんのほうだろう。

「はい。傷の方はほとんど大丈夫みたいですわね」

何も出来ないうちに、ドアの向こうの話はどんどん進んでゆく。

僅か、厚さ数センチの板。
その板を挟んで、動けないでいる少女の存在など思いもよらないように。

「そろそろ、記憶の方も戻るとええね」

キオクノホウモ、モドルトエエネ

何の気なしに、発せられた言葉。

スウーと頭が冷めていくのが分かった。

ひよっとしたら、「血の気が引いていく」とかいうやつかもしれないな…。

そう思ったとこまでしか、憶えていない。

結局、ドアは開けられなかった。

向こう側で挨拶を交わし、スリッパの音が別方向に遠ざかっていったときも、

ドアに身体をくっ付けたまま、身じろぎ一つできないままで。

しばらくして、ようやく金縛りの解けた足を引きずり、黙ってうつむいたまま、手帳をサイドテーブルに置いて、身体を投げ出すようにベッドに戻る。

「もし“記憶”が戻ったら…今の“アタシ”は…」

そこまでを、真っ白な天井に向かって呟いた。

そして、口を嚙む。

消えてしまふやろな、とは、どうしても言えなくて。

9 : o b s c u r e (後書き)

ああ…更新少し遅れました…。何しろテスト前なもので(苦笑)
今後多少不定期になるかもしれませんが、どうか応援よろしくお
願いします！

忙しいやら何やらで最近ちょっと凹み気味の雪場でした。それでは。

10: notice

「珍しいな、工藤の方から電話掛けてきよるなんて」

寝不足の目を擦りながら、受話器を耳に押し当てる。

電話機の横のデジタル時計は、昼前を正確に表示しているが、平次は今しがた起きたばかりだ。

「ほんで？またこつち来るんか？ほんなら、USJとかはどーや？」

自分で言いながら声にキレがないのが分かる。

眠いのと、工藤がそんなことで電話をしてこないだろうというのが半々。

『別にその為に電話したんじゃないよ』

予想通りに、電話口の方この相手は否定の言葉。

相手の真意を勘ぐりながら、受話器をなんと無しに持ち替える。

『…和葉ちゃんの方はどうなんだよ。あの後事件が重なっちゃまって、あれきり見舞いに行つてねーからさ…』

『オメーが凹んでねーかも、確かめにな』と悪戯っぽく付け加えるのも、アイツは忘れなかった。

手短に近況を伝える。もっとも、カズ八に関してばかりになるが。

『そつか…。和葉ちゃんじゃなく、“カズハ”ちゃんね…』

一頻り説明を終えた後、受話器から漏れた言葉。

しみりとした工藤の言い方が、ちょっと引つ掛かって聞いただす。

『いや、そういう捉え方もあるなっと思ってただけだよ』

「別に間違ってへんやろ？」

『オメーのやり方が間違ってるっではっきり言えるやつなんて、この地球上にいなーと思うぜ。何を以てその人とするなんて考えぐらい曖昧なものも珍しいからな』

「工藤はちっこくなくても工藤やからな」

『うるせーよ』そういつもの通り不機嫌に答えるのを聞いて、受話器を下ろした。

「何を以てその人とするか、か…」

結局どう走ったってぶち当たるのはその問題。

「和葉…な…」

沖縄の海にいたのも、東京へ一緒に出て行ったのも、桜舞う古都にいたのも、和葉。

一連のイメージから滞りなく、病院のベッド上の姿が目には浮かぶ。屋上での、あの感触が手に戻ってくる。

あの時の、首を傾げたカズハに、手毬を突く七五三姿の彼女がオーバーラップしてゆく。

共通点は、

抱いた、同じ感情。

そして、

オサナナジミ、としてじゃなく彼女を見た、ということ。

そこまで思いつめて、

トクン、と普段より大きな鼓動を、心臓が打つ。

思わず自分の胸に手を当ててしまう。

（この気持ちは…）

あれが初恋なら…

これも…？

「嘘…やろ…？オレが…？」

顔がポオーツと上気するのが自分でも分かる。

気合を入れるためか照れ隠しか、パンパン、と頬を叩いた。
そこで、大事なことに気がついた。

「……和葉なんか？それとも……」

…カズハ…？

配膳される、味付けの薄い病院食を食べ終えてから、彼女は簡易テーブルを引き寄せた。

「東京におる友達にでも、手紙書いたらどうや」そう言われて、父親から手渡された便箋を、サイドテーブルの引き出しから取り出す。

急に伝えようと思ったのは、多分“自分”の終わりを意識したから。

平穩に続く日々が約束されていたのなら、きっと想いは胸の内に堅く仕舞われたままだったと思う。

今まで通りに。

薄い水色のその右下には、スイートピーの小さなワンポイント。

「スイートピー…」

確か、花言葉は…

微かな記憶を手繰る。

「思い出、私を覚えていて…」

ピッタリやな、と少し寂しげに微笑んで、ペンを執った。
時折、頭が締め付けられるように痛む。

「アタシを、覚えていて……ってとこかな」

痛みの頻度が高まっているように感じる。
頭の中で、誰かの声が聞こえた気がした。

それでもペンは、一心不乱に紙の上を走り続ける。

窓から差し込む斜光の中で。

10:notice(後書き)

どうも、ここまで読んでくださってありがとうございます。雪場です。

『堕罪』に引き続き、また手紙出してしまいました…まともに書けないのに(汗)

今回も、コナンは電話で友情出演(笑)。今回は純粹に平和で行く！って言うのがテーマでもありますし、今後も…多分…実際の出演はないと思います。

次回もまた、お付き合いいただけると嬉しいです。それでは。

11: prayer

諦めれば、楽になれる。

追い駆けるから、求めるから、手に入らないことが辛くなる。

「アタシは、平次とずっとは一緒におれへんのやから…」

せやから、高望みは止めよう。悲しいだけなんやから。

この前、屋上で語ってくれた物語は、
ストーリー
部外者である自分からは、とても幸せなように聞こえて、
ちょこつと悔しかったのも思い出す。

「ええやん、アタシが諦めれば、あの二人…お似合いやし、くっ
付いて幸せになれるやん」

他人が聞いたたら惚気と思うか、奇異に感じる台詞も、
妙に客観視された、ドライな響きで唇から流れ出る。

だって…他人やん…。

どうせアタシは…和葉には、なれへんのやから…。

そう、アタシなんかより、よっぽど資格あるやん。
ちっさいころから平次と一緒に…

「遊んどつたら繫いだ手錠が外れへんようになってもうてな…」
「オレの手、持つとつた矢で刺しよつて…何考えとるんかわから
へんわ」

どれだけ平生を装っていても分かる。

思い出される、その声に、嬉しげな響きが隠れ潜んでいることに
それは、何より明らかな、証拠。

せやから…アタシは諦めなアカンねん…。
そうすれば、みんな、丸く収まるんやから…。

ベッドの上で横を向くと、超越したような、哀愁を帯びた笑みを、
夜の窓ガラスに映す。

本当に表情通りの心境でいるかと問われれば、「ちがつ」と答え
るだろう。

心を軽くするための、脆い自己防衛装置。

自分でも、それは分かつてる。

気づいているから、わざわざ声に出して嘘をつく 自分を騙した
いから。

信じてしまえるなら、信じた方がいいのかもしれない。
でも…、そう疑った時点で、もう信じることは欺くことへと変わ
る。

欺くことは簡単。思考を止めれば、それで終わり。
だけれども、自分はそれを拒み続けている。
自分を欺くことだけは……したくない。

いつそのこと、感情なんて存在しなければいいのに、と力なく微笑んでみせる。

彼女の目の前の机には、まだ書きかけの便箋。これで三枚目だ。
最初の二枚は、もう病室のくずかごの中からすら消去されている。
薄い水色のそれを見るたびに、どんどん嘘が信じられなくなつて。
思わず目を逸らしてしまう。

窓ガラスには、自分の顔。もう、あの仮面はない。
あるのは、独り煩悶している、無防備な自分だけ。

グレースケールで映る自分の向こうに、漆黒の夜がどこまでも広がる。

叶わないことを望むのは　罪ですか？

そう祈るように問いかけてみても、ガラスの少女は答えない。

11: prayer (後書き)

今回は、ちょっと息抜きというか、幕間というか…挿入節みたいなモンです。

それにしても、こういう少し暗めの話のほうがスムーズに書けるって…嗚呼（苦笑）

夜、黒、苦悩…そんなものは『墮罪』で随分書いたのにまたやってしまいました（笑）

文章にも成長の後は見られないし…まだまだ練習が必要ですね（といいながら最近時間に追われる毎日）

次回も読んでいただけると嬉しいです。それでは。

12:liquid

目の前には、いつも通り病室で小説を広げている平次。

時折視界の端でちらっと見ては、またペンを便箋に走らせていたが、ふっと手を止めると、その均整の取れた顔を挙げた。

彼はさっきから、同じページを開いたまま。

目も、文字を見ているというよりその先にあるはずの彼自身の足を見つめているようで。

「…平次？」

返事が無い。

「平次！」

平次が驚いたように身体を揺らすと、弾みで持っていた文庫本が滑り落ちた。

「ん…なんや、カズハ」

背表紙を上、床に広がった本を拾い上げながらやっと言葉が戻ってくる。

「なんや、やないわ。さっきからボーッとしたままで…どつか具合でも悪いん？」

「アホ。入院しとるお前に心配されたないわ」

そう言った傍から、また上の空。

（平次、何考えとんねんやろ…）

あれこれと想像しながらようやく書き終えた便箋を丁寧に折り返すと、封筒へ流し込んだ。

病室に着いたのは、正午を大分過ぎてから。

昨日から、いやもつと前から彼の頭の中を占領し続けている彼女は、今日もベッドの上。

黙って椅子を引き寄せて座り、小説を眺めるけれども一行も頭に入ってこない。

…もし和葉の声が違つとつても、オレはそいつを和葉やと思う。

もし和葉が標準語しゃべつとつても…和葉やろ。

もし工藤みたいになつてこくなつたにせよ…工藤と同じように、オレは和葉と認めるやろ。

ほんなら、目の前におるコイツは……？

「…じ…。……平次！」

名前を呼ばれる声で、急に現実に戻された。

「ん…なんや、カズハ」

なんでもない風に平生を装いながら、床にうつ伏せになった本を拾い上げる。

「なんや、やないわ。さっきからボーツとしたままで…どつか具合でも悪いん？」

「アホ。入院しとるお前に心配されたないわ」

ほぼ反射的に繰り返されるやり取り。

他愛無いそのやり取りが、前と全く変わらずに続いていることにやっと気づいた。

和葉に言つのと変わらない自分の言葉と、

和葉から返ってくる、同じ返事。

（コイツは…和葉なんやないかな…）

呑み込んだ唾が喉にしみて、初めて喉がカラカラに渴いていることに気づく。

「水、もらうで」と一言断って、水差しからコップに水を注ぐ。

水差しの形になってそれを半分ほど埋めていた透明な液体が、一本の筋となり、やがてコップの同じ円柱形へと自在にその姿を変えていく。

（ひよっとすると、これと同じなんかもしれへんな…）

時と共に形を変える事もあれば、何かのはずみで少し変形してしまふこともある。

それでも、どう形を変えたって、本質は変わらない。

この水のように、器に合わせて形が決まるような、そんな存在。

どんなことがあっても、コイツを満たしとるのは…“和葉”。

漠然と、そんなことを思う。

ふと目を挙げると、便箋を折り畳んで、封筒に入れている和葉が目についた。

何か大切なもののようにきちんと折り目をつけて、口を閉じている。

（コイツ、何考えとんのやろ…）

点けっぱなしのテレビの音が、一段と大きくなった気がした。

12:liquid (後書き)

やっと一段落つきました…というか、平次サイドの表記がようやく“和葉”に戻りましたが、分かりにくかったでしょうか？（結論やプロセスが曖昧なのは力不足です（泣））

話も峠を一つ越え、平次は一応結論を出したようですが、「何が和葉であるか」という問いは複雑なためにそれに対する答えは当然様々で…実際私自身でもこの小説を書いているうちに色々変わったり（苦笑）そのへんはまた機会があれば書かせていただきたいと思っています。

さて、次回はちょっと雰囲気が変わるかもしれません。「捜査開始」ですから（笑）それでは。

13 : clue

四時間目の終わりを知らせるチャイムが鳴り、一気に教室の中が慌しくなる。

急ぎ足で食堂へ向かう生徒や、友達同士弁当を囲んで話し始める生徒…。

そんな教室の雰囲気から一人ポツンと取り残されたように、平次は頬杖をつき、ぼんやりと窓の向こうを眺めていた。

碧い空の中に一筋、白く飛行機雲がかかっている。

その手前に一段低く見えているのは、フェンスで覆われた、南校舎の屋上。

平次のいる中校舎の4階よりも1階分低いので、いつも様子が見て取れる。

ぼつぼつと人が見えるのは、前の放課の間に弁当を食べ終えた生徒が屋上で遊んでいるのだろう。そういえば、和葉もよくあそこで遊ぶと言っていた。

（そーいや…）

静かに目を閉じて、学校の見取り図を思い浮かべてみる。

確か南校舎の、ちょうど今陰になってこっちからは見えない部分には、途中から出っ張るような感じに建て増しされた平屋の倉庫が

くっ付いているはずだった。

そしてその倉庫の先で、和葉は倒れていたらしい…。

そこまで考えて、平次は黙って席を立った。

少し急ぎ足で教室を抜け、廊下へ出る。

「何でもっと早く気づかへんかったんか」と心の中で怒鳴り散らしながら。

部活が終わるまでの待ち時間。

クラブにも、生徒会にも入っていない和葉はその間どうしているのだ、と前に尋ねたのを思い出した。

「友達と一緒に屋上でバレーとかしてな、ほんで時間を潰しとるんよ。」

あつこな、反対側おっきな建物無いやん、せやからめっちゃ見晴らしええんよ」

そう笑いながら答えてくれた。

平屋の倉庫の前に立つ。

色あせたモルタルの壁には、所々細かなひびが入っている。

昔は青かったらしいトタンのような屋根も、金具部分が錆び付いて赤茶色になっていた。

和葉が倒れていたらしい自分の足元。なんとなく、靴の先で小さな円を描いた。

ここに来る前に、いつも和葉と遊んでる友達を探し回って、あの日のことを問い詰めてみた。

あの日も、少し風の強い日だったが、雨が降り出すまでいつものように屋上でバレーをやっていたらしい。

屋上で遊んどった…

バレーやから多分上着は脱いだやるな…

風がちよつとばかり強い日で…

倉庫は、南校舎に隣接しとる…

ほんで和葉は倉庫前に倒れとった…

簡単な三段論法。

おもむろ 徐に灰色の雨樋を掴むと、足を掛け、反動をつけて身体を伸ばす。少し力是要るが、比較的簡単に倉庫の屋根に手が届いた。

屋根の上をちらりと見て口元だけで笑うと、そのまま腕に力を入れ、さらに身体を持ち上げた。

何とかあまりにも長い6時間の授業を耐え切り、部活をサボって家へ急ぐ。

無造作にポケットに突っ込まれたままの左手は、昼に見つけたものを握ったまま。

この季節の学ランは、帰路には暑い。

制服の第一ボタンを開け、額にうつすらと汗を浮かべたところに、やっと家に着いた。

いつも通り、何の気なしに郵便受けに突っ込んだ手に、

「…なんや?」

コトリ、と白い封筒が当たった。

13 : clue (後書き)

どうも、雪場です。 捜査開始：とおもいきや、すぐに収束（笑）

まあ今回のメインテーマではないですし、推理は。だから原因究明も今までまったくのノータッチで、一段落ついた今回、初めて蒸し返す、という構成（平次の頭が和葉のことではいっばいで、こっちまで回らなかった、ということも含めまして）を取りましたが：いかがだったでしょうか？

話自体も終盤に差し掛かって参りました。 もう少しお付き合いいただけると幸いです。
それでは。

14: envelope

「なんやろ…」

一目見た瞬間から、この何の変哲も無い白封筒から、目が離せなくなつた。

何に惹かれるのか、彼自身にも全く分からない。

強いて訊かれれば…オーラみたいなもの…それとも「探偵のカン」と答えるかもしれない。

こんなときの文字というやつは、視界に入っけていてもなかなか頭では認知されないもので、

彼もしばらく見つめて、やっと宛名が自分宛であることに気づく。

どこか見覚えのある、少し丸っこい字。

何も言わずに、裏返してみる。いつの間にか、足は止まっていた。

「なんでや…?」

思っていた通り、差出人は彼女。

ただ、理由が分からない。

「なんでアイツが、オレに…?」

“遠山カズハ”と裏に小さく書かれた封筒を握り締めたまま、平次は棒のようにその場に立ち尽くした。

玄関を開け、おざなりに「ただいま」と家の奥に投げ込んで、真
っ先に自分の部屋に駆け込む。
鞆をベッドの上に放り投げ、暑くてかなわない学ランのボタンを
全部外し、ついでにこれも鞆の上にかぶせる。

「考えろ…考えるんや…」

落ち着かない足取りで部屋の中をぐるぐると何周も回って、よう
やく足を止める。

やっと、歩くのを止める覚悟がついた。

椅子を引き、勉強机に座る。

「開けるで…」

一度大きく深呼吸をすると、封筒の上端に手をかけた。

最初の数行を読んだ時点で、一気に眼が大きくなり、慌てて最初
の行からまた読み直す。

すぐ隣で携帯が盛大に振動音を奏でているのにも気づかず、携帯
の方が諦めたように動きを止める。

「平次！電話やって」

階下で静華がそう言う声も届かず、

静華はしょうがなく階段を上って息子の部屋のドアを叩く。

「平次！」

返事がないのでドアを開けると、

「うわっ、オカン、何いきなり入ってくんねん！ちゃんと人の部屋入る前には、ノックぐらいせーや！」

平次が慌てて読んでいた便箋をポケットに突っ込んだ。

明らかに挙動不審だが、そこは静華も弁えたもの。

全く気にかける様子もなく、平然と応える度量は、さすが得意なものが「真剣白刃取り」というだけのことはある。

「遠山はんのこれから電話や。なんでも携帯に連絡しはられたらしいけど、平次、出えへんかったんやろ？」

そう言われて平次は慌てて机の上の携帯を見るが、もう動いてるはずもない。

自分でも何を言っているかよく分からない、しどろもどろの言葉を口にして、

とりあえず学ランの上着を引っつかんで、階段を叩き降りた。

そんな息子の駆け下りてく背中を見送って、部屋に留まったままの静華。

遠く電話口で「ホンマか！」と怒鳴る声がしたと思うと、すぐに

乱暴に受話器を置く音。

そしてドタバタした足音に「ちよつとまた出てくるわ!」と申し訳程度の挨拶と、ドアが閉まる音が聞こえてきた。

「ホンマに忙しい子やなあ…」

久しぶりに息子の部屋に掃除機でもかけてやるつか、とやや散らかった部屋を見ながら静華は思った。

14: envelope (後書き)

どうも、ここまで読んでくださった皆様、どうもありがとうございます。

何とか年内に終わるメドがつかしました。こっから最終章へ入っていくつもりです。

最終章は…とにかく書いて楽しかったですね。やっぱり平和は書いて楽しいです。作の甲乙は別にして(苦笑)

それにしても…静華ハン、言葉遣いが難すぎる…(泣)

平次とも、和葉とも違う、ちょっと京都が混じった言葉遣い…慣れていないので、最初の予定より随分台詞、削らせていただきました(おい)

嗚呼…これを書いていた頃は学ランが暑くてたまらなかったはずなのに、今読むと実感が湧かない(笑)

あ、ちなみにタイトルの「envelope」、封筒、という意味です。参考までに。

それでは、今後ともよろしくお願いします！

15: return

「あれっ…」

いつものようにベッド脇のテーブルで、小さな水色の置時計が7時を告げる少し前に目が覚めた彼女。

ようやく慣れてきた病院での生活。

ちようどそんな時分に、また新しい局面はやってくるもので。

その朝も、見かけ上は普段と変わらなく見えた。

だけでも、

何かが違う。

そこまで広くはない個室の中も、ベッドから眺める窓の外の薄ら寒い空も、

花瓶に飾られた名前も知らない白い花も。

なんでなん…？

そう思いつめて、はっと気がつく。

思わず自分の胸に手を当てる。

その手を、自分の胸を見つめる。

まるで、そこが夥^{おびただ}しい鮮血に染まっているかのように、こわこわと、不安と怖れの入り混じった目で。

オボエテル

自分の過去も、

本当の名も、

遠く離れた親友も、

彼と歩んだ道のりも。

そして

もう一人の“彼女”のことも

「どうしたの？まだ頭、痛む？」

突然降ってきた声に、慌てて今の世界に引き戻される。

顔を挙げると、看護婦の香月さんが心配そうに見つめていた。
知らない間に見回りの時間になっていたらしい。

「あの…香月さん…」

この人の名前も、憶えている。

「アタシ…自分のこと…、思い出しました」

「んで…今回は…？」

新大阪発東京行きの、のぞみ122号の車内。

向かいの男に答えようと口を開きかけると、背広の内ポケットが震えた。

「ちよつと、スマンな」

商売柄、こういったことはよくあるので座席は常に通路側。それも車両の一番前か後ろ、ドアに近い所と決めている。

「もしもし…」

車両のドアを出てから、携帯を耳に当てる。

「はい、はい、さようですか。おおきに…ホンマ、お世話かけまして…。」

いえ、なるべくすぐには伺わせてもらいますんで…はい、どうも」

安堵したようにほっと溜息をついて、車体のドアに付いた小さな窓から外を眺める。

田園風景の中を、電柱がもの凄い速度で駆け抜けてゆく。

しまいかけた携帯を再び開いて、或る所へ掛ける。
一度目は繋がらず、今度は少し掛ける所を変えた。

「府警からでつか？」

座席へ戻ると、向かいの同僚が訊いてきた。

「ちやう、病院からや」

午後はある件で本庁のお偉方との会議が待っている。
大阪に戻るのは明日になりそうだった。

（自分が戻れへん代わりに言うたらなんやけど…）

そのつもりで電話したのだったが、ひょつとするとアイツは親よりも彼の方を待っているのかもしれない、とそんな思いがよぎる。

「子供やとばっか思ってたけどな…」

静かに苦笑する。

同僚は、気を利かせてるつもりか返事をしない。

遠山刑事部長は、再び窓の外へ視線を向けた。

15: return (後書き)

ふう…。ついに復活です（笑）。昔書いた「砂上の楼閣」なる駄文では、シヨック療法的なもので記憶が戻る、ってな話でしたが、今回は全くそういうのナシで。

そういう激しい動きを入れないほうが平和には似合ってるかなってのと、ちよつと人生の理不尽さ…までは重くないものの、必ずしも理由が無くても変化は起こるんだよ、見たいなもの。あと、特に大きく何かをしたわけではないけれども元に戻れた、ってので「ああ、やっぱり本質的には同じものなんだな」という雰囲気を感じていたできれば幸いです。

最後の遠山のおやつさんの件くだり…というよりおやつさん本人、結構気に入ってます（笑）もちろん、刑事部長が電話を掛けた相手は、言わずもがな。前回から繋がってますし。それでは。

看護婦さんが出て行った後のドアを、なんとなく見つめていた。

頭の中で漠然と、慌しかったここ数日を振り返る。

それと同時に、みんなはどうしているだろう、などと思ふと思う。

もう家には連絡行ったやろな…とか、
すぐに退院できるんやろか…とか。

平次は、いつごろ知るんやろか…

「えっ？」

何か、大切なものを忘れてる気がして、思わず声を漏らす。
しばらく思案しているうちに、みるみる和葉の顔色が変わっていった。

弾かれたように飛び起きると、急いで引き出しの中の物を引っ張り出す。

探し物が見つからなくて、最後には引き出しそのものを引っくり返す。

祈るような気持ちで積み上げられた中味を見るが、

やっぱり…無い…。

間違っていて欲しいと願った記憶。

それはもう、九分九厘…いや、完全に真実。

「アカン！そんな絶対アカン！」

思いついたようにがばつと振り返り、壁のカレンダーを見やる。
あの日から、既に二日。

「…確実に届いとるやん…手紙…。どないしょ…」

正確に届く郵便局をこんな時だけは恨んでみたりするのだが、後の祭り。

記憶が戻った途端ブルーに叩き落された彼女に追い討ちをかけるように、

病室のドアが乱暴に開いた。

（嘘やろ…まさか…、もう来たん？）

ドアの向こうから現れたのは、

「和葉…！お前の記憶が戻ったって…ホンマか！」

全力疾走で来たのか、大きく肩で息をしている…、予想通り、平次。

「ちゃうつて、ちゃうつて！あれは…アタシが書いたんじゃないもん！」

慌てて右手を顔の前で振って否定する。

必死に叫ぶ声が聞こえたのか聞こえてないのか、構うことなく平次はずいっと病室の中に入ってくると、

そのまま黙ってベッドに近づいてきて、

「えっ…」

斜め前から、優しく和葉を抱きしめた。

完全に上気して真っ赤になっている和葉からは、真横の平次の耳と頭は見えるものの、肝心の顔は見えない。

それでも、はっきりと聞こえた。

「オレは…お前が…、和葉が、好きや」

「なあ平次、せやからあの手紙は…」

「んなもん関係あらへん。オレは…お前が好きやねん」

間髪入れずに戻ってくるのは、低く小さいけれども、しっかりとした声。

「お前は…オレのこと、嫌いなんか？」

「アホ。嫌いなわけ、ないやん…」

顔の見えない、言葉だけのやり取り。
それでも、お互いの気持ちと温かみは、痛いほど伝わってくる。

おずおずと、少し控えめに和葉は平次の背中に手を回そうとする。その右手が、学ランのポケットに当たって止まった。

平次の手が、和葉の右手よりも先にポケットの中に滑り込む。

「ああ、これ、忘れモンやぞ」

取り出したものを、そのまま和葉の右手に押し付ける。

「これって…」

ゆっくりと開かれた、端正な手の中には、
雨で少し汚れた…例の、お守り。

「大方バレーやつとるときに、上着と一緒に外して隅置いとった
ら風に煽られて屋上から落ちて倉庫の上乗ったんやろうけど…」

かっこつけてるわけでも、はしゃいでるわけでも無いその声が、
何故か妙に甘酸っぱくて、

あの…二人の手錠きずなの欠片を、和葉はぎゅっと握り締める。

物音一つしない病室の中は、二人しかいない世界。

「取ろうとしてお前はひっくり返って頭ぶつけるわ、人にはぎよーさん迷惑かけよるわ…やっぱこれ、縁起悪いんとちゃうんか？」

「…アホ…。目茶苦茶縁起ええお守りや…」

静かに目を閉じる。

せや、最高のお守りや…。

アタシと平次を、オサナナジミから卒業させてくれたんやから…。

16: confess (後書き)

そうです、結局お守りに帰結。ワンパターンだなとは自分でも思いますが、私の中ではもう水戸黄門の印籠並に必需品になってます(苦笑)

うーん、個人的に気に入ってるのは、「んなもん関係あらへん」って台詞かな。

決めるまでは優柔不断だけど、一旦決めたら徹頭徹尾やり抜く、そんな人じゃないかな。平次は。

最後少し急ぎ足になったような感はしますが、スピード感も出なかったし、「結局些細な(?) 平和な日常の「コマなんだ」みたいな印象を読み返してて思ったので、自分の中ではありかな、とも(笑)

さて、後はオマケとエピソード、あとがきぐらいで完結です。

感想なんかも、簡単でもいいのでもらえるとめちやくちや喜ぶと思います。単純な人間なので(笑)

あ、手紙の内容は…察しがつきましたよね？

オマケが実は手紙だった(り(書けるのか?と自分で不安(滝汗))

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございます。最後まで是非、お付き合いください。

17: Letter from Kazuha to Heiji

Dear HEIJI

平次のことやから、「手紙なんて似あわへんことやめとき」って笑うかもしれへんけど、

今のアタシじゃ直接言にくいところもあつたんやから、その辺は分かってな。

この手紙を読むときには、ひよつとしたら“カズハ”はもうおらへんかもしれへん。

唐突でびっくりするかもしれんけど、看護婦さんとかお医者さんの話し聞いとつても「そろそろ」っていうのがなんとなく伝わってくるし、アタシ自身、“潮時”みたいなもんを感じるんよ。

それに2、3日前から、時々頭が痛くなるようになって、今でも、ずっともう一人のアタシが、頭の中で何か話しかけてきてる。

手、動かしてへんと、他の何かをしてへんと、その声に耳傾けてしまいそうで…なんか思い出しそうで…怖い。

それが本来あるべきもんなんや、って頭では分かつとつても、やっぱり、自分が消えてまうのは…みんなから忘れられてまうのは、どうしようもなく怖い。

せやけど…いつまでも、アタシがおつてもアカンよね。
うん、そのことは多分アタシ自身が一番よく分かってると思う。
アタシの場所は、借り物の場所やから。

そんなアタシやけど、アタシがおつたっていう証拠しるしみたいなもん
が残したくて、それに伝えておきたいことも幾つかあって、それで
慣れへんペンを執ったんよ。

それに、平次だけにはどうしてもアタシが存在したってこと覚え
ておいて欲しかったし…

勝手なワガママやけど、堪忍してな。

前に平次、「オマエはオマエや」ってアタシに言うてくれたよね。
その時からずっと、アタシは平次のオサナナジミの“和葉”とは
別やとばっか思ってた。

それがちよつと変わり始めたのが、部屋で平次が花瓶落とした日。
あの日の夜、病院の屋上で平次、アタシに昔の話、いっぱいして
くれたやん。

平次の話に出てくる和葉は、
アタシと同じ喋り方して、全く同じ考え方で。
やっぱ同じ人なんか、ってついつい思ってたまう。

ねえ、…アタシ…カズハは、和葉と同じなんやろかな？
もしそうやったら…ちゃう、そうあって欲しい。

何でって？

…せやったら今まで通り、平次の傍におれるやん、な？

最後に、一つだけ言つてもええよね？

面と向かつては言えへんし、こんな最後の最後にならへんと言
い出せへんかったけど…

アタシ、好きやったんよ、平次のコトが。

余計なものも含めて、いろいろと世話焼いてくれて、ホンマに、お
おきにな。

Yours、

KAZUHA

17: Letter from Kazuha to Heiji (後書き)

ああ…手紙書けねえ（自爆）、と自分で原因を作っておきながら後悔しきりの雪場です（苦笑）

一応、署名がローマ字表記なのは理由が。お分かりの方もいらっしゃると思いますが。

（伝わってなければごめんなさい。私の文才の不足です（泣））
自分が“和葉”であることを願っているから…というつもりでしたが…一応……。

気を取り直して、はい、次で最終話の予定です。多分、明後日か明々後日に投稿するつもりですので、どうぞ最後まで読んでやってください。それではっ。

18: epilogue

退院してから、もう3日。

前と同じ様にセーラー服に着替えて、カバンを掴んで、家を飛び出す。

心持ち、軽くなったような足取りで、彼の許へと急ぐ。

「平次〜!」

インターホンを押して、玄関越しに名前を呼ぶ。

いつもより少し早めだけでも、ちゃんと眠そうな返事が戻ってくる。

わざとらしく大きな欠伸をひとつして、

早ようから叩き起こしよって、眠ってかなわんわ、そう呟きながらもきちんと準備を整えた平次。

「ひよつとして、もう起きてたんとちゃう?」

「なんでそんなこと訊くんや?」

お前が勘ぐるなんて珍しいな、そんな目で聞き返された。

「全然返事になってないやん」

問い詰めても、どこ吹く風。

「んなことより、早よ学校行くで」その一言で片付けて、どんどん

ん平次は歩き出す。

「ズルイわ…」

ちよつとむくれた様に呟くと、平次の背中がおどけたように肩をすくめて見せる。

平次の後ろについて、通学路に出る。

誰かに呼ばれたような気がして、ふつと振り返る。
家の前の一本道。これといって人影も無い。

誰に向かうともなしに、微笑んでみせる。

今までと同じ様な毎日。

せやけど今までよりも…ずっと強く結び付いとる。

お互いの、気づかなかった気持ちを知った分、

鉄の手錠キスナよりも、もっと近く…しっかりと。

「何やっとなねん、先行くで」

背を向けたままの平次が、カバンをクルリと肩の横で一回転させる。

「待ってゝな、平次！」

風に乗ってふっと、花橘の香りがした。

思わず、自分の胸に手を当てる。

「大丈夫、ちゃんと持っとる」

前を行く、学ランの背中を目指して、駆けだす。
最高の、笑顔と一緒に。

18: epilogue (後書き)

今回で「和葉×カズハ」の本文は完結です。執筆に2ヶ月ぐらいかかったでしょうか。10月頃にはもう書き始めていたと思います。連載も同じくらいで駆け抜けました…ちよつとした達成感かな、今あるのは。「終わったな」ってな感じで（笑）
それでは、感想やメッセも、お待ちしています！かなり励みになりますのでっ。

あとがき

どうも、最後までお付き合い頂きましてありがとうございます。
これは作者のつらつらとした覚書ですので、「読んでらんねーよ」
って方は飛ばしていただければ。

えっと…今回、純粹に平和だけでの長編としては初挑戦になりました。

「ネタがないから」で敬遠してきたんですが、いくつか頂いた「平和で甘い」とのリクエスト、その一つ（名前は一応伏せておきますね）に「瞳の中の暗殺者みたいの」とあるのを見て、

『記憶喪失ネタなら…書けるかも』はい、二番煎じです（笑）

結局、甘い話というより重い話になってしまった辺りは性^{さが}とい
べきか（苦笑）

今回はですね…「名前」「その人自身」について書いてみたかつ
たんですよ。まあその時点で重い話確定ですが。後は、話の中で
どんどん平次とか和葉とかの考え方が変化していく、そんなプロセ
スも書いてみたかつたし（不自然になってなければいいのですが…）
個人的には、名前にせよアイデンティティーにせよ本人がそう信
じてることが大切だと想いますが、こんな話、きっと誰も望んでな
いと思うので切り上げます（笑）

悩みはしましたが書いていて楽しかったですね。やっぱり大阪
の二人は何を書いても楽しく書けます。なるだけ恋愛に対して不器
用に不器用に…な平次がコナンに電話で一蹴されるあたりは、自分
でも結構気に入ってます。もちろん、お互い他人のことは分かるん
ですが（笑）あとは…“prayer”でちよつと自己犠牲的な面

も出せたかな、ってな「ええやん、アタシが諦めれば…」の件もかな。（でも本当は諦めきれないんですよ、もちろん）

次回作は…ある程度構想は決まっていますが、今回とはガラッと変わった話になるかと。

ただ、間に合うかなあ…春ごろまでに書き上げれば投稿させてもらいます。終わらなければ…一年後ぐらいに（笑）

それでは、今後ともどうぞよろしくお願いします。感想や評価を下さった皆さん、そして読んで下さった皆さん、こんな駄文に最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

12月28日 雪場

<修正に当たって>

やっと実力テストなるものから解放されましたので、ようやく修正に漕ぎ着けました。最初は修正しないことも本気で考えましたが、評価してくださった皆様方に申し訳ないような気がしまして…結局修正しました。

それにしても、自分の文章を読み返すのは何度やっても辛いです（笑）最新作でこれだから、順次昔のを修正していくとどうなることやら…パンドラの筐をあける気分でしょうか。

あ、でもパンドラの筐って、確か最後に“希望”残ってましたよね。残ってるかな…私には（笑）

急いで修正掛けましたので、読みにくくなっている箇所があるかもしれません。最大限私の方でも探してみるつもりですが、もし発見されましたらメッセでも感想欄でも構いませんのでご一報くださると嬉しいです。それでは、失礼しました。

P・S：次回作ですが、どうも行き詰まり気味なので、今書いて

るのはまたプロット考え直すことにして、新しく書き始める…ことになるかも（嗚呼、また仕上がるかどうか微妙になった…）なるたけ急いでみますが、なんにせよ執筆速度遅いもんで（苦笑）気長に待っていただけると幸いです。

2月1日

雪場

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1636b/>

和葉×カズハ

2010年10月14日02時24分発行